

[概要]

本研究では、地方都市である富山県富山市の郊外地域にあたる富山県射水市の太閤山ニュータウンを事例に、高齢者の場所アイデンティティの形態の移り変わりおよび帰属意識の形成過程を検討した。また、高齢者の場所アイデンティティの形態の移り変わりおよび帰属意識の形成過程から、居住者にとっての、地方都市郊外地域が持つ場所の意味を考察した。場所アイデンティティについての検討にレルフの内側性の概念を援用し、場所に対してより深く「内側」になるほど、場所アイデンティティの関係構造に太閤山ニュータウンでの長年にわたる生活の中で蓄積された意味が付与されていることがわかった。また、調査対象者の帰属意識は一樣ではなく、子どもを通じた経験を拠り所としたもの、地域にかかわることを通じた経験を拠り所とするもの、無意識的に太閤山地域に根差していることを拠り所とするものがあると考えられた。居住地における経験を通して場所アイデンティティの形態を変化させ、帰属意識を形成することで、高齢期の居住者にとって、郊外地域は意味を持つ場所になっていると考えられる。

キーワード：高齢者，地方都市郊外，場所アイデンティティ，帰属意識，場所の意味